

# 「モンゴル年代記」の成立と その後代への展開の研究

井 上 治

1. はじめに
2. 「モンゴル年代記」とは何か
3. 17世紀モンゴル年代記の特徴と成書の歴史的背景
4. 18世紀から19世紀成書のモンゴル年代記へのアプローチ
5. 1911年以降の“モンゴル国家の歴史”
6. おわりに—北東アジア地域研究への位置づけ

## 1 はじめに

筆者は、モンゴルの一国史に関する問題を扱う予定にしている。とりわけ興味を抱いているのは、筆者が専門としてきた「モンゴル年代記」と称される歴史書（群）の、より後代への展開にかかわる問題である。具体的には、約300年に及ぶ清朝の支配を1911年に脱し、国家としての独立を宣して以降のモンゴル人歴史家が著した“モンゴル国家の歴史”において、それ以前に成立していたモンゴルの歴史記述がどのように引き継がれたかに興味を持っている。

後述するところからお分かり頂けることだが、筆者は、17世紀から20世紀までにモンゴル人の歴史家がモンゴル語で著述した歴史書を取り扱う研究を構想している。現在は、史資料の収集を進めつつ、歴史書の初歩的な読解に着手したところであるので、何か特定の結論に到達するような報告のレベルに達していない。本稿は、研究の始動に当たり、筆者が構想する研究のアウトラインを述べることと、北東アジア地域研究においてはほとんど取り上げられることのない「モンゴル年代記」の成立とその歴史的背景を踏まえた上で、前近代から近代のモンゴルで著された歴史書の記述の変遷をとらえて、それを北東アジア地域研究の枠組に位置づける方法の検討にとどまることをお許し願いたい。

## 2 「モンゴル年代記」とは何か

1911年以前に成っていたモンゴルの歴史を記した史書の一部は「モンゴル年代記」と称されている。筆者の知る限りでは、「モンゴル年代記」のもっとも包括的で新しい研究

は森川哲雄『モンゴル年代記』[森川2007]である。この著作は概説的な部分が多いとはいえ、以下に挙げる点で、これまでにない包括的な「モンゴル年代記」の概論になっている。

森川の定義によれば、「モンゴル年代記」とは「一般にモンゴル人の手になる、モンゴル語で記された、編年体の体裁を持った歴史書をいう」[森川2007: 7]。このように定義した上で森川は、『元朝秘史』、『チャガン・テウケ』（白史）、『アルタン・ハーン伝』、著者不明『アルタン・トプチ』（黄金史）、『蒙古源流』、『アサラクチ史』（慈氏史）、『シャラ・トージ』（黄史）、ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』（黄金史）、『ガンガイ・ウルスハル』（ガンジス川の流れ）、『蒙古世系譜』、『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク』（金輪千輻史）、『ボロル・エリケ』（真珠の念珠）、メルゲン・ゲゲン『アルタン・トプチ』（黄金史）、『アルタン・ナブチト・テウケ』（金葉史）の14種の歴史書に考察を加えている。また、紙幅の都合で取り扱うことができなかった、19世紀成書の「モンゴル年代記」4種、そしてモンゴル諸語あるいはモンゴル語の方言であるオイラド語とブリヤート語で著された年代記も「モンゴル年代記」の範疇に含まれるとしてその存在に言及している[森川2007: 435]。

これらのうち、『元朝秘史』は、13世紀後半には成ったと考えられるモンゴル語で書かれたはずの原典が散逸し、現在は原典のモンゴル語を漢字で音写した版本のみ伝わる。これ以外の『チャガン・テウケ』から『アルタン・ナブチト・テウケ』までは16世紀末から18世紀中盤にかけて成った歴史書であり、すべて縦書きモンゴル文字によるモンゴル語で書かれた古版本が現在まで伝わっている歴史書である。また、紙幅の都合で森川が取り扱わなかった19世紀の「モンゴル年代記」4種を加えると、「モンゴル年代記」は13世紀後半の『元朝秘史』から1841年に成ったガルダン著『エルデニイン・エリケ』（宝の数珠）がその範疇に入るとというのが森川の見解である。森川が考察し、あるいは言及している「モンゴル年代記」は、内モンゴルやモンゴル国、ロシアなどですでにモンゴル語テキストが刊行された著名なものばかりである。これら以外にもモンゴル語で書かれた編年体史書が存在することは言うまでもないが、森川は代表的な「モンゴル年代記」をほぼ網羅して扱っているのである。

このような定義と「モンゴル年代記」に包摂される歴史書群は、森川の突飛な独創では決してない。モンゴル年代記学の礎を築いたブリヤート人ジャムツァラノの『17世紀モンゴル年代記』[Zhamtsarano 1936]に始まり、モンゴル人民共和国のペルレーの『モンゴル革命前の歴史記述の諸問題』[Perlee 1958]、ドイツのハイシヒの『モンゴル家族・教法史』第1巻[Heissig 1959: 17-111]、内モンゴルの留金鎖の『13世紀から17世紀のモンゴルの歴史記述』[Liu 1979: 127-317]やボルジギン（包文汉）とチョイジ（乔吉）らの『モンゴル語歴史文献概述』[包文汉等1994: 20-92]、そして新しいところでは、2011年にモンゴル国で進められた一大プロジェクトである「17世紀のモンゴル史料諸原典」シリー

ズ五巻の刊行にも看取される。つまり、森川が取り上げ、あるいは言及している「モンゴル年代記」は、ジャムツアラノ、ハイシツヒ、ベルレー、留金鎖、ボルジギンとチョイジらもたいい取り上げているという点で標準的であり、しかもより詳細な分析を加えている点で優れた概論である。筆者もまた通常はこの森川の定義に則った理解を有している。

### 3 17世紀モンゴル年代記の特徴と成書の歴史的背景

上に示した、モンゴル年代記学の名著が扱ってきた年代記は、主に17世紀に成ったものである。森川が扱った年代記のうちでは、『チャガン・テウケ』からロブサンダンジン『アルタン・トプチ』までが17世紀モンゴル年代記に当たる。

モンゴル語で書かれた最古層の歴史的著作は、13世紀中盤に成ったと思われる『元朝秘史』である。これは、上天の定めによって生まれたモンゴル人の伝説上の始祖ボルテ・チノよりテムジン（後のチンギス・ハン）誕生までの歴史、チンギス・ハンの一代記、チンギス・ハンを継いだオゴタイの半生記を内容とする。この『元朝秘史』の後を継いで現れたモンゴル語史書は、16世紀末に成ったと考えられている『チャガン・テウケ』であり、この間には300年もの空白がある。

ここで、この約300年の間のモンゴル史に起こった重大な出来事を概略的に挙げておく。モンゴル人が中原に立てた王朝である元朝のハーン、トゴンテムルが、明の太祖朱元璋が差し向けた北伐の軍を避けて1368年に首都の大都（今の北京）を脱出した。この後のモンゴル人の中では中央アジアのムスリム勢力や明朝の干渉もあって有力な王侯による内訌が絶えず、強大な権力を振るうハーンが現れなかった。そのような中、15世紀末にはほぼ現在の内モンゴルとモンゴル国に相当する領域を回復したダヤン・ハーンが現れたが、ダヤン・ハーンの死後は再び有力王侯がハーンの権勢を上回る実力を振るうようになった。そのような有力王侯の一人に、現在の内モンゴルの中部に拠ったアルタンという者がおり、16世紀前半から強大化した。アルタンはその前半生には、拠点とする内モンゴル中部の東西南北に向けて精力的な軍事行動を展開したが、晩年の1570年代に入ると、明朝と和平を結び、チベット仏教に心を寄せ、自ら青海湖の畔にまで出かけてダライラマに帰依し、現在の内モンゴル自治区の首府が置かれているフフホトを仏教の一大拠点に発展させ、1582年に死んだ。アルタンの帰依ののち、チベット仏教はモンゴル人の間に急速に伝播し、今日もなおモンゴル人の主たる宗教となり続けている。この約300年の時期、モンゴルは、有力王侯や外の勢力による内訌や混乱とダヤン・ハーンによる一時の安定を経て、アルタンの晩年になって中原の明朝との和平と仏教の伝播を経験していた。

筆者の見解では、くだんの『チャガン・テウケ』が編まれたのは、このアルタンの仏教帰依のすぐ後のことであった。『チャガン・テウケ』は、インドからチベットを経てモンゴルに仏教が伝わり、それを国教に定めた元朝のフビライの治政を記したものである。このような内容を持つ『チャガン・テウケ』が編まれたのは、アルタンが仏教に帰依したこ

とを承けて、モンゴル人が仏教を奉じるべき歴史的理由を明らかにするためであった〔井上1992〕。そして、『チャガン・テウケ』の後には、上にその題名を掲げた各種のモンゴル年代記が編まれるようになった。これは、チベットに蓄積された仏教史の知識と情報が、仏教とともにモンゴルにもたらされたからであると考えられる。17世紀に入ってから成ったモンゴル年代記のほとんどには、宇宙と人間そして人間界はいかに成ったか、仏教はいかにしてインドのマガダの地に現れたか、その仏法を護持したインドの聖王たちや高僧らはどのような事績を残したか、仏教がインドからチベットにどのように伝播し、チベットの聖王たちや高僧らはどのような事績を残したか、チベットの王の末裔はいかにしてモンゴルの地に到来して「蒼き狼」の血を引くモンゴル人たちを統べ、チンギス・ハンの誕生を迎えたか、といった内容が記されている。このような仏教史的情報は、現存最古のモンゴル語による歴史記述である『元朝秘史』には存在しないものであり、チベット由来の知識を援用して初めて記述可能なものである。また同じく17世紀以降のモンゴル年代記の多くに見られる、チベット仏教の高僧を帰依処としたフビライ・ハーン以降の元朝諸帝の事績もチベット由来の史的情報であると見られるところから、モンゴルのハーンに伝承される事績にかかる記述は、その源泉をチベット史書に負っていると考えるのは間違いない。

一方、仏教とは無縁の歴史物語のような記述も存在する。それは、チンギスの事績や大都を脱出したトゴンテムル・ハーン、そしてモンゴルの混乱期とそれを収めたダヤン・ハーン以降のモンゴルのハーンやアルタンに代表される有力王侯の事績を記した部分に看取される。このような記述の史料的源泉は明らかにしえないものが多く、おそらくはモンゴル人の歴史的口承文芸であろうと推測されている。

このように、アルタン期のチベット仏教伝来は、モンゴル史を仏教弘通史の中に位置づけ、その中に『元朝秘史』や口伝に由来するモンゴル独自の歴史を寄せ集めた形のモンゴル年代記の成立を可能にした。これまでのモンゴル年代記学が、17世紀モンゴル年代記を中心的な興味の対象としてきたのは、ひとえにそれらが『元朝秘史』以降ながく現れなかったモンゴル語で書かれた歴史書であるという理由によるところが大きいと思われる。また、『元朝秘史』を祖型とするモンゴルの歴史記述とは大きく異なり、モンゴル人の歴史をインドにまで遡らせて仏教弘通の歴史として説きだしたという、モンゴル人の歴史記述の劇的な変化にも研究上の興味が集まりやすかったと考えられる。

#### 4 18世紀から19世紀成書のモンゴル年代記へのアプローチ

アルタンの後継者たちの権勢は長くは続かなかったが、それによってモンゴル年代記の編纂は断絶しなかった。アルタンの後継者たちがまだ勢力を守っていた17世紀初頭、モンゴルの政治的な最高権威であるハーン位を1603年ごろに継いだリグデン・ハーンが勢力の回復に乗り出した。リグデン・ハーンはアルタンが帰依したダライラマの宗派とは異なる派のチベット仏教に依ったが、熱心な仏教徒に変わりはないので、モンゴルに

おけるチベットからの仏教史的知識の受容は断絶しなかったと思われる。しかし、リグデン・ハーンの勢力拡大は周囲のモンゴル王侯には受け入れられず、モンゴル諸部のうちもっとも東に位置する王侯らは、当時勢力を伸張させていた満洲のヌルハチと同盟関係を結び始め、モンゴル諸部に徐々に満洲の政治的影響が強まっていった。そのような情勢下、リグデン・ハーンは西部への遠征に力を注ぎ、1628年にはフフホトを占領してアルタンの後継者を滅ぼしたが、1634年に青海地方の手前で病没した。リグデン・ハーンが西方に転出している間のモンゴルは、ヌルハチを継いだホンタイジに制圧されており、帰還する場所を失ったリグデンの息子は1635年にホンタイジに降った。これを契機にモンゴル人は満洲（後金国、清朝）の統治下に入ってゆく。いわゆる17世紀モンゴル年代記のうち、著者不明『アルタン・トプチ』はモンゴルが清朝の統治を受けるようになった時期以前に成ったものではないかと考えられているが、それ以外は清朝統治期に入ってから成ったものである。

既存のモンゴル年代記学の研究成果を一瞥すると、18・19世紀モンゴル年代記の研究は17世紀年代記に比べて量的に少ないものの、優れた研究と有益な概説が現れている。上述のハイシツヒは18世紀に成った13種の歴史書を対象に、17世紀年代記に対して採ったのと同様に、その版本の分布と優劣を論じ、著者と著年の確定を試み、内容の全体像を示し、そのうち特徴のある内容を紹介、分析、研究した [Heissig 1959: 112-203]。また、上述のボルジギンらは18・19世紀年代記として7点を概説した [包文汉等1994: 93-177]。森川は18世紀のモンゴル年代記として『ガンガイン・ウルスハル』、『蒙古世系譜』、『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク』、『ボロル・エリケ』、『メルゲン・ゲゲン』、『アルタン・トプチ』、『アルタン・ナブチト・テウケ』の合計6種を概論し、19世紀のモンゴル年代記として、1837年のジムバドルジ著『ボロル・トリ』（水晶の鏡）、1835年のイシバルダン著『エルデニイン・エリケ』（宝の数珠）、1835年のゴムボジャブ著『ソボド・エリケ』（真珠の数珠）、1841年のガルダン著『エルデニイン・エリケ』（宝の数珠）の4種の名称を挙げている [森川2007: 350-432]。

これらの研究から、18・19世紀モンゴル年代記には17世紀のものには見えない特徴が存すると認められている。それは、17世紀前半にモンゴル人が満洲人の清朝の統治下に入って以降、モンゴル人知識人が満洲語に習熟し、同じく清の統治下に入った漢人とチベット人の言語と文化にも習熟し、それらの歴史書から吸収した新しい知識と叙述法が強く反映されているという点である。『資治通鑑』系の編年体史書や正史の『金史』・『元史』やその訳本によって中国上代から元朝の歴史を記述し、区切りのよいところで評語を添えるなどの漢文史籍の影響が時代を降るに従って濃厚になる。また、前代に増してチベット語で書かれた王統史や教法史を盛んに利用するようになって、インド・チベット・中国・モンゴルの仏教弘通史の量が格段に多い年代記も存在する。さらに、先行する17世紀モンゴル年代記の記述を再利用した部分も多い。このように、清朝の統治下に入ったモンゴル

人の歴史学が、同じようにその統治を受けるようになったチベットと漢地の歴史学的方法の影響を、前代に比してより強く受け、それを摂取するようになった。

以上のことは、上述した先行研究の成果から知れていたことであるが、チベットと漢地からの歴史学的知識と方法が、モンゴルに伝統的に受け継がれてきた知識と方法と、18・19世紀モンゴル年代記においてどのように混在していたのかについて論じたのが、バザロワ『モンゴル年代記：文化的記念物』[Bazarova 2006]とツェンディナ『17～19世紀モンゴル年代記：伝統の叙述』[Tsendina 2007]である。これらは、個別の年代記に着目する従来の手法とは異なり、モンゴルの王権に関わる記述の変化や漢籍・チベット典籍の影響などのテーマを定めて、その記述の様を年代記毎に確認することや、モンゴルの伝統的歴史記述・チベット伝来の仏教王統史記述・漢籍伝来の編年体記述の重層化状況を明らかにしようとした研究である。これらの研究には、王権関連記述の推移や漢籍・チベット典籍の影響の記述様態、記述の重層化の状況を個別の年代記に限定しているために、説明が断片化している面があり、通年代記的・通時的に発展させる余地がある。

## 5 1911年以降の“モンゴル国家の歴史”

1911年に独立を宣したモンゴル国家は、フレー（今のウランバートル）に座した8世ジェブツンダンパ活仏を君主に戴いた。君主に担がれた活仏は「ボグド・ハーン（聖王）」と尊称されたところから、1924年にボグド・ハーンが遷化するまでを、モンゴル史ではボグド・ハーン政権と称する。この間の1921年には、モンゴル人民党による革命（モンゴル人民革命）が成功したが、引き続きボグド・ハーンは君主の座にあった。1924年、遷化したジェブツンダンパ活仏は転生しないとされ、モンゴル人民革命党の一方独裁による社会主義国モンゴル人民共和国が成立した。1980年代後半、モンゴルにもソ連のペレストロイカが波及して民主化運動が高まり、モンゴル人民革命党の一方独裁政権は1990年に崩壊、1992年にはモンゴル人民共和国からモンゴル国へと改称、新憲法を制定して社会主義を完全に放棄し、このモンゴル国が現在も続いている。

ボグド・ハーン政権期では、1918年から翌年にかけて『欽定モンゴル国史』が編纂されている。『欽定モンゴル国史』の内容と記述の体裁は、清代の『欽定外藩蒙古回部王公表伝』という清代官製のモンゴルの王公貴族の系譜と伝記にならったものであり、引き続き清朝の歴史記述の強い影響のもとにあったことがわかる。

筆者がより興味を持っているのは、この『欽定モンゴル国史』ののちに成った、清代官製史書の強烈な影響を脱したと思われる史書であり、2015年にモンゴル国で復刻刊行された「モンゴル原典史料」シリーズ7巻に収められた史書のうち、アマル著『モンゴル簡史』（1934年）[Amar 2015]、イシドルジ著『モンゴル国略史』（1924年）[Ishdorzh 2015]、デンデヴ著『中世モンゴル史』（1949年）[Dendev 2015]の3種である。これら3種は、上古からのモンゴル史を叙述している。たとえば、アマルの『モンゴル簡史』は

先史時代からチングスの治世までを扱っている [岡2011: 39-41]。この末尾には、43種類の参考史料を用いたことが記されており、上掲の18・19世紀に成ったモンゴル年代記4種 (『ボロル・エリケ』、『アルタン・ナブチト・テウケ』、『ボロル・トリ』、『エルデニイン・エリケ』) が用いられていたことがわかるので [Amar 2015: 186-187, 329-330]、17～19世紀のモンゴル年代記の記述との比較が可能である。1911年以前に成立していた17～19世紀モンゴル年代記の記述がこれら3種の史書にどのように引き継がれたかを考えたい。また、すでに橋が指摘しているように、『資治通鑑』系の史書 [橋2015] や遼金の紀事本末類などの漢文史籍、おそらくモンゴル語訳か満洲語訳が43種類の参考史料の中に挙げられている。さらに、アルメニア語史料やプラノ・カルピニの旅行記のモンゴル語訳、グルム・グルジマイロ (Грум-Гржимайло, Г.Е.) やコロストヴェツ (Коростовец, И.Я.)、コトヴィチ (Kotwicz, W.) の著述のモンゴル語訳が用いられたことも記されている。これらカフカス史料やロシアの学知は、モンゴルの独立と社会主義化に大きな影響を持ったロシア、ソ連を介してモンゴルにもたらされたものである。そしてまた、チベット語で著された3種の宗教史 (chos 'byung) も用いられた [Amar 2015: 186-187, 329-330]。このように、ひとつアマルの史書を例にとっても、前代のモンゴル、チベット、漢、満洲に加えて、ロシアとソ連由来の歴史的知識・情報や叙述方法が取り込まれていたことは明らかである。モンゴルの国史編纂が、ロシアとソ連を介して獲得した西方の学知によって、清代までに形成されていた学知空間と年代記における定着様態からどのような変容を遂げたのかは、興味深い研究対象であると考えている。

## 6 おわりに一北東アジア地域研究への位置づけ

2016年11月19日の報告の場での質疑応答において、筆者の興味が果たして北東アジア地域研究といえるのか、という至極もったもな質問を受けた。

筆者が所属する鳥根県立大学北東アジア地域研究センターでは、日本、中国、ロシア、モンゴル、朝鮮半島 (韓国、北朝鮮) を北東アジア地域に属する国家・地域として考えている。筆者が興味を持つ研究課題をこの全域に及ぼそうと考えるならば、それぞれの国家と地域において、前近代の歴史記述と近代の一国史との関係を比較対照する方法がまず構想されるであろう。これは、大きな到達目標として望ましいことはいうまでもない。しかしこのような壮大な構想を筆者ひとりが実現するのは不可能である。

本稿で筆者が提示した研究は、モンゴルの近代に到るまでの歴史的知識が、ひとりモンゴルの学知によって形成されたものではなく、各時代の地域関係を通じて獲得した学知によって作り上げられてきたものであることを見通そうとするものである。モンゴルが関係を持った諸地域は、本プロジェクトの掲げる北東アジア地域に他ならない。上での概観を通じて、モンゴルの歴史記述は、現在いうところの日本、中国、ロシア、朝鮮半島 (韓国、北朝鮮) のすべてから歴史的知識や情報を獲得してきた訳ではないが、チベット、中国、

ロシア由来の歴史的知識や情報を受け入れて形成されてきたことが明らかである。近代に成った“モンゴル国家の歴史”のひとつに数えられるデンデヴ著『モンゴル簡史』では、日本の矢野仁一が1925年に著した『近代蒙古史研究』のモンゴル語訳が用いられており [Dendev 2012: 133, 注3]、朝鮮半島(韓国、北朝鮮)を除く国家・地域の学知を動員していたことがわかる。モンゴルの一国史形成の過程は、北東アジア地域が蓄えていた歴史的知識を統合した結果であるとまではいえないにしても、北東アジアの知的空間によって形成されたことは否定しようがないと思うのである。

## 参考文献

- Amar 2015 Амар, Анандын. *Монголын товч түүх*. (Монголын эх түүх 1) Улаанбаатар: Соёмбо принтинг.
- 包文汉等1994 包文汉・乔吉等(編)『蒙文历史文献概述』、呼和浩特:内蒙古人民出版社。
- Bazarova 2006 Базарова, Б.З. *Монгольские летописи : памятники культуры*. Москва: Academia.
- Dendev 2012 Дэндэв, Лхамсүрэнгийн. *Монголын товч түүх*. Улаанбаатар: АДМОН.
- Dendev 2015 Дэндэв, Лхамсүрэнгийн. *Дундад үеийн Монголын түүх*. (Монголын эх түүх 3) Улаанбаатар: Соёмбо принтинг.
- Heissig 1959 Heissig, W. *Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen*. Teil 1. (Asiatische Forschungen : Monographienreihe zur Geschichte, Kultur und Sprache der Völker Ost- und Zentralasiens, Bd. 5) Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 井上 1992 井上治『『チャガン・テウケ』の2つの系統』、『東洋学報』73(3・4)、366-343頁。
- Ishdorzh 2015 Ишдорж, Базарын. *Монгол Улсын хураангуй түүх*. (Монголын эх түүх 2) Улаанбаатар: Соёмбо принтинг.
- Liu 1979 Liu Jinsuo, *Arban yurba – arban doluduyar jaγun-u mongγul-un teiike bičilge*. Kökeqota: Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy\_a.
- 森川 2007 森川哲雄『モンゴル年代記』、白帝社。
- 岡 2011 岡洋樹「モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」、『歴史の再定義: 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識の学術・教育』、37-69頁。
- Perlee 1958 Пэрлээ, Х. *Монголын хувьсгалын өмнөх үеийн түүх бичлэгийн асуудалд*. Шинжлэх ухаан, дээд боловсролын хүлээлэнгийн хэвлэл.
- 橘 2015 橘誠「モンゴルの国史編纂と翻訳文献 – Ch. バトオチル抄訳『通鑑』・『綱目』について』、『下関市立大学論集』59-1、93-103頁。
- Tsendina 2007 Цендина, А.Д. *Монгольские летописи 17-19 веков: повествовательные традиции*. Москва: Российский государственный гуманитарный университет.
- Zhamtsarano 1936 Жамцарано, Ц.Ж. *Монгольские летописи XVII века*. Москва-Ленинград: Издательство Академии наук СССР.



**付記** 本稿は、筆者が2016年11月19日、人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」島根県立大学 NEAR センター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」第一回国際シンポジウム 2016「北東アジア：胚胎期の諸相」での報告で用いた原稿に、当日頂いたコメントを踏まえて若干の補足と字句の修正を加えたものである。

**キーワード** モンゴル年代記、一國史、近代モンゴル、前近代モンゴル、北東アジア

(INOUE Osamu)

